座談会

思考レベルに応じた多彩な教科指導で「軸」と「修正力」を育む

変化の大きな社会を生き抜くために必要な「軸」と「修正力」。高校生活の中でこれらを育む上で、教科学習はどのような役割を果たしていくのだろうか。入試で求められる教科学力を身に付けさせながら、生徒の10年後につながる教科指導を展開するために、現場ではどのような創意工夫が行われているのか、4人の教師が語り合った。

外発的動機から内発的動機へ学習の軸の質的転換が必要

編集部　教科指導において、今後生徒に必要な「軸」と「修正力」をどのように育むかが今回のテーマです。まず、自分で学習を進めていく上で必要な目的やこだわり、すなわち「軸」を生徒にどのように育んでいるのかをお聞かせください。

齋藤　多くの高校では、1年生への初期指導を通じて「高校ではこれだけの学習量を確保しよう」「予習→授業→復習を習慣にしよう」と生徒に伝え、学習状況調査などでチェックしています。言わば、教師による外発的な動機付けでの学習の軸づくりです。しかし、外発的動機付けだけで学習のモチベーションを維持することは困難です。生徒の中に「もっと学びたい」という気持ちを生む内発的動機付けも行うことで、高校3年間でより太い学習の軸が出来るのではないでしょうか。

山内　高校生になると学習量が増えることを初期指導で伝えることは大切です。ただ、伝えただけで「とにかく3年間頑張れ」という指導では、

栃木県立黒磯高校
齋藤良則　さいとう・よしのり
教職歴33年。同校に赴任して1年目。教頭。栃木県立大田原高校に21年間勤務後、現職。担当科目は物理。
栃木県立黒磯高校◎1925（大正14）年創立。14年度入試では、国公立大は、山形大、福島大、宇都宮大などに37人が合格。私立大は、慶應義塾大、日本大、立教大などに延べ229人が合格（現浪計）。

福井県立高志高校
山内　悟　やまうち・さとる
教職歴27年。同校に赴任して5年目。SGH事務局長。担当教科は英語。
福井県立高志高校◎1948（昭和23）年創立。14年度入試では、国公立大は、東京大、福井大、京都大、大阪大などに257人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ518人が合格（現浪計）。

従順な生徒たちはフラフラになってしまいます。「何のために学ぶのか」を考えさせる指導が重要だと私も思います。

鈴木　「高校時代はとにかく勉強して、先のことは大学に入ってから考えればいい」という考えがかつて社会全体にあったのは事実です。確かに「なぜ学ぶのか」といった問いに、生徒は「生きていくための素養、人間力を育むため」といった言葉でしか答えられないかもしれません。ただ、そうした抽象的な答えであっても、生徒自身から発せられたかどうかは大きな違いだと思います。「勉強しよう」と教師が言うことはもちろん必要ですが、それだけでなく、生徒に「言われたから勉強する」状態を超えさせることが必要なのでしょう。

愛知県立成章高校
鈴木孝育　すずき・たかやす
教職歴31年。同校に赴任して15年目。進路指導主事。担当教科は国語。
愛知県立成章高校◎1901（明治34）年創立。14年度入試では、国公立大は、名古屋大、京都大、大阪大などに74人が合格。私立大は、上智大、中央大、立教大、南山大などに延べ484人が合格（現浪計）。

中村　量も質も中学時代を凌駕（りょうが）する高校の厳しい学習に耐えることは、人生の様々な局面で踏ん張る力に結び付くはずです。ただ、いつまでも教師が与えるのではなく、同じ目標の生徒が自然に集まって勉強をするなど、自発的な学習へ誘いたいものです。外発的動機から内発的動機による学習へと変化するタイミングは生徒によって違うからこそ、いつでも自分で学習のスイッチが入れられるように、授業開きから学ぶことの意味を生徒に問い掛けるように心掛けています。

三重県立四日市南高校
中村陽明　なかむら・あきひろ
教職歴15年。同校に赴任して1年目。担当科目は化学。
三重県立四日市南高校◎1959（昭和34）年創立。14年度入試では、国公立大は、名古屋大、三重大、大阪大などに141人が合格。私立大は、慶應義塾大、同志社大、立命館大などに延べ846人が合格（現浪計）。

齋藤　8月号の特集では、「年齢と共に増える経験、身に付けた知識やスキルに応じて、進路選択の幅が広がるべきではないか」という問題提起がありました（本誌8月号P.9）。生徒が自分の中に学びの目的、軸を見付けることは、進路選択の幅を広げる意味でも重要だと思います。

異なる思考レベルを重層的に体験できる授業を

編集部　では、外発的動機付けから内発的動機付けへの転換は、教科指導の場面ではどのように仕掛けていくことが出来るのでしょうか。

山内　英語学習における思考レベルには、単語や文法を覚えたり、それらを当てはめて日本語に直したりする低次のものと、異なる考えなどを比較・解釈したり、自分の意見を述べたりする高次のものがあります。生徒が意欲的に学習に取り組むのは、高次の思考を求められた時であることは様々な研究で明らかになっています。実際、言いたいことをうまく伝えるために辞書を引いたり、友達と相談したりする学習と、具体的な目的が明示されないまま言われた通りに行うだけの学習とでは、理解の深さが異なります。高次の思考を求める学習を日々の学習に取り入れることで、学習の動機付けの質的転換が図りやすくなると思います。

鈴木　同じことは国語でも言えます。語彙（ごい）力がないと自己表現することは出来ないですし、相手の話も理解できません。その気付きがあってはじめて、基礎が必要なのだという学習への納得感が生まれます。また、授業や模試の問題などで良い作品に

出合えたことがきっかけで、読書が豊かになる生徒もいます。評論の授業で教科書の素材文について問いを発展させ、「このテーマにはこんな課題も隠れている」と問い掛けると、教科書の内容以上のことを自分で考えようとする生徒が出てきます。

中村　理科や数学は、答えだけでなく、答えに至るまでの過程も問われる教科ですが、グループで学習することで、「答えの導き方は多様である」ことを学び合うことが出来ます。また、学習内容が日常生活と結び付いた瞬間、知識が生きたものになり、高次の思考へと変わります。そうした体験が「もっと知りたい」という意欲につながるのだと思います。

齋藤　高次の思考を可能にするためにも、学習に対する自信、自己肯定感が欠かせません。それらを得るためには、ある程度の量をこなすことを生徒に求め、学習の質を高めることが必要です。ただ、重要なことは、成果がいつまでも実感できなければ、生徒の中にはやらされ感ばかりが残ってしまうということです。成果を実感させられなければ、生徒の学びを継続し、高次の思考につなげることは出来ないということは、現実的ですが、学びの本質にかかわることだと思います。半面、成果を実感することで新しい課題にどんどん挑戦し、教師の想像を超える力を発揮した生徒を何人も見てきました。

「生徒の中にやらされ感を募らせないためにも、確かな学習の成果が必要」 齋藤

「低次の思考と高次の思考の両方を必要とする授業を低学年次から目指す」 山内

山内　今、求められているのは、低次の思考と高次の思考が並行できる授業を、低学年次から行うことだと思います。従来の英語指導では、単語や文法を身に付けてから、表現活動に移るという考えが中心でした。しかし、最初が知識注入一辺倒では、表現活動に入った時、生徒は「間違ったらどうしよう」と臆してしまいます。学年でバランスを変えるにしても、どちらかの活動だけに終始するべきではないでしょう。

「こうなりたい」という感情の高まりを逃さない

編集部　次に、教科学習で育む「修正力」について、先生方の考えをお聞かせください。授業進度や自身の学力の変化、学習内容の質的・量的変化に対して、予習・復習のやり方や学習内容の優先順位付けなどを修正すべき機会が生じます。「修正力」を身に付けるそのチャンスにどのような指導が求められますか。

鈴木　私たちはややもすると、多くの学習課題を生徒に与えることで、生徒に手を掛け過ぎになりがちです。教師から与えられるのを待っているのではなく、自分の足りない部分を自覚し、それを優先的に学習する力を身に付けさせたいと誰もが思っているはずです。10月号で紹介されていた札幌日本大学高校の「N.Assist」（本誌10月号P.12）は、生徒が自分で理解不足の箇所を自覚し、優先的に取り組むべき課題を考える、学習上の修正力を高めるシステムとして好例でした。

齋藤　若い先生方には、個人面談の価値を大切にしていただきたいと思います。学級担任との面談だけでなく、各教科担任との面談も実施し、学習上の目標と計画について生徒の考え、更には各教科に対する気持ちも聞き取っていくことが大切です。

山内　自分の成績を生徒がどう感じているのか、その気持ちを聞いていくのは重要だと思います。もっとこういうふうになりたいと生徒が望んだ時に教師が助言してこそ、良い影響を与えることが出来ますから。

中村　生徒が、「これだけやっているのに、なぜ成績が伸びないのだろう」と尋ねてきた時、初めて自己修

正のスタートラインに立つのだと思います。そうした気持ちになる前に教師がいくらアドバイスしても、生徒は聞き流すだけです。やはり生徒の状態の見極めが重要で、手を差し伸べるのをぐっとこらえなければいけない時も少なくありません。

山内　ひたすら単語だけを覚えている生徒が、長文を読めるようになりたいと望んだとしても、それはすぐには無理です。どのような力を付けたいかを本人に確かめ、どのように勉強を進めればそれが実現できるかを考えさせ、アドバイスしたいですね。どんな学習法がふさわしいのか、生徒自身が目的を踏まえて理解することが学力向上の第一歩です。

鈴木　教師が与える課題をこなしさえすれば、学力が身に付くというものではありません。生徒が主体的に自己の課題を見付けて努力することはもちろん、教師もそのことを心に留めておきたいものです。

多様な人間関係の中で学びの意欲を育みたい

中村　3年間しかない高校生活の中で、試行錯誤して何かを成し遂げるという体験を、部活や行事だけでなく、学習においても1つでも多く経験させたいです。そうした多様な成功体験が、社会で壁に直面した時に突破する力になると思います。

「厳しい状況の中で踏ん張り、何かを成し遂げる成功体験を学習においても積ませたい」**中村**

齋藤　人生で直面する様々な課題に、自分の知識を総動員して向き合い、足りなければ周囲の手を借りながら解決する……そんな生き方が出来る生徒を育みたいですね。

鈴木　変化の激しい時代だからこそ、ぶれない学習の軸を維持するためには、信じ合い、支え合う仲間との邂逅（かいこう）が必要だと思います。私たちは、生徒同士が健全な切磋琢磨（せっさたくま）をして学び合う環境を整えてやることが急務ではないでしょうか。

「生徒同士が〝仲良く〟切磋琢磨（せっさたくま）して学び合う環境を整えてやることが大切」**鈴木**

山内　何のために学び、どこでつまずいているのかを、生徒が自己開示しながら励まし合い、修正し合えるクラスをつくりたいと私も思います。また、いろいろなテーマについて、他教科の先生や大学、地域の人たちと共に、英語を使って思いや意見を語り合い、答えを模索する場を日々の授業の中につくりたいです。

中村　難しいことを知ってさえいれば難しい問題が解けるということではなく、知っていることを上手に組み合わせ、活用できた時に難問が解ける……大学入試でも、社会の課題でも同じことが言えるのではないでしょうか。日々の授業で、生徒がそうしたことを実感できる小さな手応えを積み重ねていくことで、生徒の学びの軸を太くしたいですね。